

農村女性組織の活動と集落の維持・活性化に関する研究

農林生産学科 助教

中間 由紀子

目的

農村女性を代表する組織に婦人会がある。日露戦争後、女性の修養を目的として全国各地でつくられ、戦前から戦後にかけて活発な活動を行う。その後、高度経済成長等の影響により農村の過疎化が進行し、それに伴って婦人会も次々と解散に追い込まれていく。しかし、農村を取り巻く厳しい状況にも関わらず、現在も継続して活動を行っている婦人会も存在する。そうした婦人会がなぜ存続することができたのか、活動が集落到どのような影響を与えているのかについて考察することは、近年衰退傾向にある中山間地域集落の維持、さらには活性化を考える上で非常に重要である。

本研究では、雲南市吉田町民谷地区の婦人会（現・女性部）を対象に、組織体制、組織の性格、活動内容の変遷について明らかにする。それを通じて、婦人会の活動が民谷地区の維持・活性化にどのように寄与しているのかについて検討することを目的とする。

研究成果

文書資料および関係者からの聞き取りを基に、民谷地区における婦人会の組織体制、組織の性格、活動内容の変遷について明らかにした。民谷地区は、宇山集落と民谷集落から成る。文書資料において各集落の婦人会の存在が認められるのは、1937年7月31日に開催された「大日本国防婦人会吉田村分会」の創立委員会である（「大日本国防婦人会」は、全国の女性を戦争に協力させることを目的として1932年に結成された組織である）。委員会には「各部落婦人会長」が構成員として加わっている。少なくともこの時点で宇山と民谷に「部落婦人会」（文部省系統の組織）が存在していたのである。同年8月2日、「大日本国防婦人会吉田村分会」が発足する。会長は「曾田為市」（吉田村小学校長）、名誉会長は「田部梅野」（22代・田部長右衛門夫人）であった。宇山と民谷はその下部組織（「宇山班」、「民谷班」となる。分会会則「第四條」には「本会ノ主旨ニ賛同スル吉田村居住ノ婦人一戸一名ヲ以テ組織ス」と規定されており、全戸参加が義務づけられていた。活動は、出征者家族の手伝い、「千人縫」の作成など「銃後の守り」に関するものが中心であった（『よしだ 第一輯』、愛郷会、1938年、71～74頁）。

1942年、国策により「大日本国防婦人会」、「大日本連合婦人会」、「愛国婦人会」が統合し、「大日本婦人会」となる。3団体の統合を受けて「吉田村分会」も改称するが、組織の性格や活動に変化はなかった。1945年6月、「大日本婦人会」の解散により、「吉田村分会」やその下部組織である宇山・民谷班も解散する。官製団体としての婦人会はここで一度消滅する。しかし、正式な名称こそないものの、民谷地区の婦人会は実質的には存続していた（藤原節子さんからの聞き取り、2014年11月23日）。

終戦後、全国各地で婦人会が結成され始める。吉田村では1946年に「吉田村婦人会」が発足する。会長は「田部喬子」（23代・田部長右衛門夫人）であった。下部組織として宇山と民谷に「支部」が置かれた。宇山の支部長は「花籠ソノエ」、民谷の支部長は「木村アサノ」であった（『婦人月報』1月号、吉田村婦人会、1949年）。戦中の「吉田村分会」と同様に、1戸から1名の参加が義務づけられていた（大島淑江さんからの聞き取り、2014年11月23日）。主な活動内容は、上部組織である飯石郡連合婦人会および吉田村婦人会が主催する総会、講習会（洋裁など）への参加であった。

民谷地区の婦人会に大きな変化が訪れるのは2009年頃のことである。宇山支部は「ひまわり会」、民

谷支部は「なでしこ会」に改称する。組織の性格も全戸参加から有志の組織へと変化した。現在の活動内容は、旅行など会員同士の親睦が中心である（大島佳子さんからの聞き取り，2014年12月14日）。

社会への貢献

①民谷地区の維持・活性化への貢献

本研究を進めることにより、女性部の活動が宇山・民谷両集落の維持に寄与していることが明らかになる。女性部の存在意義が明らかになることで、会員は活動に対する自信を深め、活動を活発化させていくことが予想される。また本研究では、「ひまわり会」（宇山）と「なでしこ会」（民谷）の連携についても提示する。これまでほとんど交流の無かった両組織が一体となって活動を行うことで、集落間の交流が盛んになり、民谷地区全体の活性化にもつながると考えるためである。

②高齢者福祉への貢献

現在、民谷地区では交流センターを拠点としてさまざまなイベントが行われている。その一つに高齢者のサロンがある。サロンでは回想法を用いた認知症予防が行われており、本研究の成果（とくに婦人会の歴史に関する箇所）は、その場における活用が期待されている。

③農村女性組織活性化への貢献

本研究の完成により、民谷地区における婦人会の存続要因およびその活動が集落の維持・活性化にどのように寄与しているのかが明らかになる。活動が停滞している他の中山間地集落の女性組織にとって、本研究の成果は有益な情報となりうる。

次年度に向けた検討状況

本研究の目的を達成するためには、戦後結成された婦人会がどのような変遷を辿り、現在の女性部につながるのか、その詳細について明らかにする必要がある。そのために引き続き文書資料の収集と関係者に対する綿密な聞き取り調査が不可欠である。次年度は、宇山集落および民谷集落の元婦人会員を対象に、組織の性格、運営方法、活動内容、会員数等の変遷について聞き取りを実施する。次に、「ひまわり会」および「なでしこ会」の会員から、婦人会から女性部へと変化した経緯、運営方法、活動内容、会員数等について聞き取りを行う。

公表論文

なし

学会発表等

1. 中間由紀子：農村女性組織の活動と集落の維持・活性化 島根大学生物資源科学部ミッション“中山間地域活性化”および農村経済学教育コース“農村調査分析論”合同報告会 民谷集落センター（雲南市吉田町）

受賞等

なし

外部資金

なし